

# 学校教育の現場に学ぶ

## —小学校外国語活動の事例研究—

太 田 かおり

### はじめに

2011 年度より小学校外国語活動が必修化され、全国の小学校 5・6 年生に各週 1 コマの外国語活動が義務付けられて 3 年が経過した。外国語活動の成果や課題が未だ十分に検証されないまま、2013 年 12 月には文部科学省から「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」が公表された。これによると、現行の学習指導要領では「小学校 5・6 年生に週 1 コマの活動型英語教育」と定められているのに対し、新たに発表された英語教育改革実施計画では「小学校 3・4 年生に週 1 ～ 2 コマ程度の活動型英語教育、小学校 5・6 年生に週 3 コマ程度の教科型英語教育」と改定されており、2020 年度からの全面実施を目指している（文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」参照）。さらに、英語教育の開始時期の早期化や授業時間数増、ならびに小学校高学年における教科化や専科教員の積極的活用等についても明記されている。この英語教育改革実施計画の推進に伴い、小学校外国語活動は早くも再び大きな変革の年を迎えることとなるであろう。小学校外国語活動に係る教育改革は、小学校 - 中学校 - 高等学校 - 大学の英語教育全体に波紋が及ぶ論点であるため、小学校教員のみならず、いずれの段階で英語教育に携わる者も、注視すべき重要課題である。

中学校や高等学校において英語科教育を受けてきた多くの人にとって、中学校および高等学校の英語授業の様子を想像することは比較的容易と思われる。しかし、「小学校の外国語活動」となると、今一つイメージが湧かない人も多いのではないだろうか。なぜならば、自身が経験していない学校教育課程を想

像することは、決して容易なことではないからである。実際のところ、小学校外国語活動と中学校英語科教育は「似て非なるもの（加賀田，2012：16）」と言われている。中学校や高等学校、大学等で英語教育に携わっている者にとっても、小学校外国語活動は学習指導要領や客観的資料等から一定の理解は得られるものの、その実際については想像の域を超えるものではなく、未知の世界に近いとも言える。

小学校外国語活動は、必修化後3年が経過したところであるが、果たして実際の小学校教育現場における外国語活動は、どのように指導され、児童たちはどのように学び、どのような指導効果が得られているのであろうか。小学校外国語活動をめぐる種々の議論が近年盛んに交わされているが、実際の外国語活動に関する教育現場の様子を知らずして、その成果や課題について一方的に意見を述べることは机上の空論ともなり兼ねず、的を射た議論が充分にできるとは言い難い。

以上のような観点から、小学校外国語活動を論ずるにあたり、筆者は先ずもって実際の外国語活動の教育現場へ足を運ぶこととした。本論文は、必修化後およそ3年が経過した2013年12月に外国語活動の授業を参観した際の記録および所見について報告し、小学校外国語活動の現状と課題について考察することを第一の目的とする。なお、外国語活動の時間を参観するにあたり、事前に6つの観察上のポイントを設定した。(1) 外国語活動の指導者は誰か（学級担任とALTの役割分担）、(2) 授業で使用される言語の比率はどのようになっているか（英語と日本語の使用比率）、(3) 学習環境整備の工夫としてどのようなことが観察されるか、(4) 教材・教具はどのようなものを使用しているか、(5) 授業内容はどのように構成されているか、(6) 外国語活動における児童の学習の様子および授業の雰囲気について、の6つの観察ポイントに関し、以下に考察を行う。

## 小学校外国語活動の参観記録

### 参観の意義・目的

本研究にて、小学校外国語活動を参観する意義および目的は、以下の3つである。

1. 小学校外国語活動の必修化から3年が経過した現在、小学校5・6年生の外国語活動を参観し、実際の教育現場における授業内容や指導法、児童の様子等を観察する。
2. 小学校、中学校、高等学校および大学等で英語教育に携わる者や、必修化以降の小学校外国語活動に興味・関心を持つ者に対し、外国語活動の授業参観記録や記録写真、所見を示すことによって、小学校外国語活動に係る情報共有の一助とすることを目指す。
3. 参観記録をもとに、小学校外国語活動の現状および課題について考察する。

### 参観学年・授業

北九州市内の市立小学校6年生・外国語活動の時間

### 観察対象

指導者：小学校6年生学級担任とALTによるティームティーチング

学習者：小学校6年生児童35名

### 参観時期

2013年12月2日（月）、12月9日（月）

### 6つの観察ポイント

「外国語活動の時間」を参観するにあたり、事前に設定した6つの観察ポイントは以下のとおりである。

1. 外国語活動の指導者は誰か（学級担任と ALT の役割分担）
2. 授業で使用される言語の比率はどのようになっているか（英語と日本語の使用比率）
3. 学習環境整備の工夫としてどのようなことが観察されるか
4. 教材・教具はどのようなものを使用しているか
5. 授業内容はどのように構成されているか
6. 外国語活動における児童の学習の様子および授業の雰囲気について

## 参観記録と所見

### 1. 外国語活動の指導者は誰か（学級担任と ALT の役割分担）

外国語活動の授業は、学級担任と ALT の二人の指導者が児童たちから一番よく見える前方黒板前に共に立ち並び（写真1）、学級担任と ALT がチームティーチング形式で進行していた。学級担任と ALT は、互いの能力を最大限に発揮できる役割に徹しつつも、ペアとして支え合いながら息の合った授業



写真1 外国語活動の授業風景：外国語活動を指導する担任（右）と ALT（左）

運営を行っていた。児童にとって ALT は、英語によるインプット量の増大や正しい発音、英語のリズムやイントネーションの体得、異文化理解教育等の点において、欠かせない存在である。一方、学級担任は、児童の学習活動の円滑な進行やクラス全体の雰囲気づくり、児童個々人の理解度の確認等を行いながら授業を掌る上で、必要不可欠な指導者である。

例えば、数字の 15 (fifteen) と 50 (fifty) の発音の違いや、before と after

の意味・用法についてALTが英語で説明した場合、ALTによる英語の説明だけでは十分に理解できない児童も中には存在する。これに対し学級担任は、ALTにもう一度繰り返すよう指示を与えたり、日本語による補足説明を必要に応じて加えたりすることで、学習者の不安や理解不足を補っていた。特に、英語学習初期段階にある小学生児童は、ALTの英語が必ずしも十分に理解できているとは限らない。ゲームルールや指示内容が上手く伝わらず、不安なまま授業が進行してしまうことのないよう適切な支援が必要であるが、この点に関する学級担任の積極的な関与は、児童の心理的不安軽減という側面において意義が大きい。また学級担任は、ALTの英語に続いて繰り返し発音したり、デモンストレーションを行ったり等、学習者の模範的存在にもなっていた。さらに、「もっと声を出そう」、「聞こえたとおりの英語を繰り返して言おう」等の指示や、今どのようなことに気を付けて学習すべきか等、学習上の留意点に係る指示も学級担任を通じて繰り返し徹底が図られていた。児童を褒めたり励ましたりして学習者の動機付けを行い、より効果的な学習を促す役割も学級担任は担っていた。

クラス全体に目を配りながら、児童個々人の理解力や学習状況にも配慮した授業運営を図っていく指導技術に関しては、学級担任の右に出る者はいない。ALTが音声教育や異文化理解の指導面で特に能力を発揮するのに対し、学級担任は、授業・学級運営、学習者の動機付け、学習者の心理的不安解消・軽減、日本語による学習補助、学習者の理解度の確認、学習上の留意点の確認、学習者の模範、効果的学習の促進等、児童個々人とクラス全体の両面に関わる指導において様々な役割を果たしている。小学校外国語活動の現場は、種々の課題を抱えてはいるものの、上述の点に関しては、外国語活動に学級担任が欠かせないと言われる所以であろう。この点に関し、加藤（2014）も学級担任が指導を行うことについて、「英語学習における児童一人一人の学習特性や興味・関心をつぶさに見取り、発達段階に対応した、きめ細やかな指導が可能になる（p.67）」と述べている。

## 2. 授業で使用する言語の比率はどのようになっているか (英語と日本語の使用比率)

小学校外国語活動で使用される言語に関して、ALT は授業全般に亘って英語のみを使用し、学級担任は基本的に日本語で授業を行っていた。ALT は、教室全体によく行き届く大きな声とはっきりとした口調で、ゆっくりと聞き取りやすい英語を話した。明るい笑顔を絶やすことなく児童と接し、児童たちも全体として活発で積極的に授業へ参加していた。一方、学級担任は、授業のほとんどを日本語で進行していたが、その役割は多岐に亘っていた。学級担任が果たす役割の詳細については前述のとおりであるが、特に英語と日本語の二言語間における橋渡しの役割を担っている点は大きいようである。既に述べたとおり、外国語活動で頻繁に実施されるゲーム活動では、英語に不慣れな児童がALTの英語を理解できないケースが見受けられた。学級担任は、言語活動を行う前にゲームやルールの説明を必要に応じて日本語で補足し、児童が不安なく活動へ参加できるよう配慮していた。そのさじ加減はまさに職人技と言えるほど適確であったが、これは日頃から学校生活の中で児童に日々携わっている学級担任だからこそ成せる指導であると感じた。これに関連し、加藤 (2014) は、児童に対して行ったアンケート調査結果について「ALT の話す英語が理解できず、外国語活動に苦手意識を感じている児童の姿が浮かび上がってくる (p.66)」と報告しており、学級担任が日本語を介して児童の理解を補助する指導が一定の役割を果たしていることに言及している。

今後、外国語活動の早期開始化に伴い、ALT を含む指導者の更なる増大が求められると予想される。「学級担任+ALT」という現行の指導体制を継承するのか、もしくは「専科+ALT」あるいは「専科のみ」の指導形態を取るのか、今後慎重な議論が進められて行くはずである。外国語活動実施対象学年の拡大に伴い、指導者の育成と確保が喫緊の検討課題となるであろう。その際、外国語活動指導者の「英語音声の明瞭さ」については特に留意が必要であると考えている。小学校学習指導要領において、音声指導の重要性が強調されていることに異論はない。しかし同時に、目標とする指導が実現可能な指導者の育成と

確保を担保することが必要不可欠である。児童の成長過程を担う指導者としての資質に加え、音声敏感期<sup>1</sup>に英語教育の基礎を築く指導者として、指導者自身が英語音声に関する一定の知識と指導力を持ち合わせていることが欠かせないと捉えている。

### 3. 学習環境整備の工夫としてどのようなことが観察されるか

外国語活動の時間になると、児童らは教科書と筆記用具を持って通常学習しているホームルーム教室から「外国語教室」へ移動し授業を受ける(写真2)。

外国語教室の入口には「外国語」の表札があり、外国語活動や異文化理解教育を学ぶ教室として活用されている。外国語教室



写真2 外国語活動を行う教室の入口

室に入ると、壁一面に英単語とイラストが併記された絵カードがたくさん掲示されていた(写真3)。これらの単語カードには、児童の日常や身の回りに関連の深い英単語が記されており、見易く理解し易いよう種類ごとに分類されて掲示されていた。外国語教室内に掲示されていた英単語をまとめると、以下のとおりである。

---

<sup>1</sup> 音声敏感期に関する敏感期仮説(Sensitive Period Hypothesis)または臨界期仮説(Critical Period Hypothesis)は、敏感期や臨界期が外国語学習には存在しており、この時期を過ぎると学習や習得が困難になる、という考えに基づいた仮説である。特に外国語学習の発音習得に関しては、臨界期が存在するとの立場を示す研究もある。日本の英語教育に小学校外国語活動が導入された背景には、このような考えが影響したとも言われている(小嶋他, 2010、白井, 2010)。

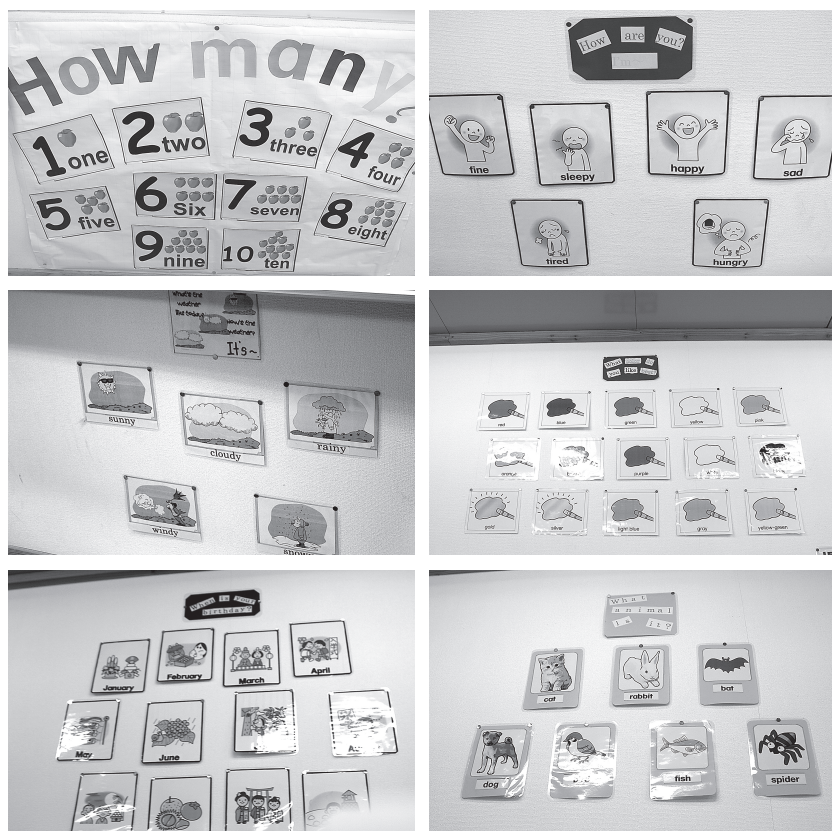


写真3 外国語教室内に掲示された英単語・イラストカードの一例

- 1) アルファベット Alphabet chart --- Aa, Bb, Cc, Dd, Ee, ..., Zz
- 2) 数字 How many? --- one, two, three, four, five, six, seven, eight, nine, ten
- 3) 天気 How is the weather today? --- sunny, cloudy, rainy, windy, snowy
- 4) 挨拶 Hello? / Good ~ . --- morning, afternoon, evening, night
- 5) 気分 How are you? / I'm ~ . --- fine, sleepy, happy, sad, tired, hungry
- 6) 曜日 What day is it today? --- Monday, Tuesday, Wednesday, Thursday, Friday, Saturday, Sunday

- 7) 月 When is your birthday? --- January, February, March, April, May, June, July, August, September, October, November, December
- 8) 色 What color do you like best? --- red, blue, yellow, orange, black, white, pink, green, brown, gray, light blue, silver, gold, purple
- 9) 国名 Where do you want to go? --- Japan, America, France, Greece, Brazil, Italy, China, Korea, India, Thailand, Germany, etc.
- 10) 果物 What fruit do you want? --- apple, orange, peach, melon, lemon, kiwi fruit, cherry, pine apples, grapes, strawberry
- 11) 動物 What animal is it? --- cat, rabbit, bird, fish, bat, spider, dog
- 12) 場所 school, supermarket, fire station, hospital, convenience store, bookstore, police station, post office, park, restaurant, station, flower shop, department store
- 13) スポーツ What sports do you like? --- tennis, baseball, basketball, table tennis, swimming, soccer, badminton, volleyball

写真3に例示のとおり、外国語教室内に掲示されている英単語は「数字」、「天気」、「挨拶」、「気分」、「曜日」、「月」、「色」、「国名」、「果物」、「動物」、「場所」、「スポーツ」等の種類ごとに分類されており、児童が興味を持てるよう色や大きさも見易く、掲示方法に工夫が施されていた。なお、教室内に掲示されていた英単語の数は100個を超えており、中学校初年次段階で学習する英単語の多くが含まれていた。

#### 4. 教材・教具はどのようなものを使用しているか

授業では、Hi, friends! のテキストがほぼ毎回の授業で使用されていた。ALTや学級担任は、デジタル版Hi, friends! をパソコンや電子黒板上で手際良く活用していた（写真4）。デジタル版Hi, friends! は、テキストに準拠したアニメーション映像や文字情報に加えて、音声やイラスト、映像資料等が豊富に

用意されたデジタル教材である。電子黒板はタッチパネル式で操作が可能となっており、付属のタッチペンを使用すると画面上の時計の針を自在に動かしたり、文字や数字を入力したりできる仕組みとなっていた。学習したばかりの時刻の表現方法に関し、児童は幾つかの時刻例を英語で聞き取り、手元のテキスト内に解答を書き込む課題に取り組んでいた。時刻は、数字で表記するパターンと時計の文字盤イラスト上に長針と短針を書き込む形式の2種類で出題されていた。答え合わせの際、ALTは電子黒板の画面を操作し、時計の針を動かしていた。



写真4 電子黒板でデジタル版 Hi, friends! の画面を操作する ALT



写真5 外国語活動で電子黒板を操作する児童(左)と ALT (右)

また、挙手にて指名された児童が皆を代表して解答例を示す際にも、児童は慣れた様子で電子黒板を操作していた(写真5)。外国語活動の授業において、電子黒板等のデジタル機器教材が指導者と学習者の両方によって概ね有効に活用されている様子が窺えた。

テキストとデジタル版 Hi, friends! は電子黒板と共に頻繁に授業で使用されていたが、その日に学習する英単語の絵カード (eat breakfast, take a bus, get up, go to school, go to bed, watch TV, play the piano, clean my room, take a bath, study at home, play soccer, play basketball, swim, etc.) や時計文字盤の教具等も併せて活用されていた(写真6)。

言語活動では、児童各人におはじきが5個ずつ配布された。2人1組のペアとなり、互いのおはじきが置かれた絵カードについて、Student A: “What time do you ~?”, Student B: “I (動詞) at (時刻).”と練習し合うペアワーク活動が行われた。おはじきの置き位置を変えることで自由に設問パターンを幾通りにも変えることができ、繰り返し実施可能な練習問題として、小さなおはじきがアクティビティー活動の中で有効に活用されていた（写真7）。

なお、文字指導に関して印象的であったのは、アルファベットや単語の綴り字指導を小学校

外国語活動では基本的に行っていないため、ALTや学級担任がチョークで黒板に文字を書く場面はほとんど観察されなかった。これは、現行の小学校学習指導要領に準ずる指導内容であり、外国語活動においては一般的な傾向であろうと推察される。なお、文字指導について学習指導要領は、「アルファベットなどの文字や単語の取扱いについては、児童の学習負担に配慮しつつ、音声によるコミュニケーションを補助するものとして用いること（小学校学習指導要領外国語活動編，2010：35）」と明記している。しかし、小学校外国語活動における文字指導の是非については、冒頭でも述べた英語教育改革実施計画や児童の発達段階等を考慮した上で、今後活発な議論が展開されることとなるであ



写真6 授業で使用する絵カードと時計の文字盤教具

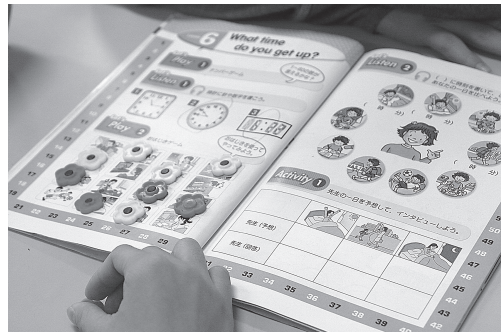


写真7 おはじきを活用したアクティビティー

ろう。

ところで、前述の教室内掲示物や授業で使用する絵カードは全て「イラスト＋英単語綴り字」で表示されており、日本語の意味は併記されていなかった。これは、イラスト表示によって、既にイメージ情報と意味情報が伝達され得るため、「イラスト＋英単語綴り字＋日本語の意味」ではなく「イラスト＋英単語綴り字」という表記方法が採られているものと推察される。「イラストのみ」の表示では、イラストに関する日本語の意味情報が優先的に思い浮かぶため、「イラスト＋英単語綴り字」がセットで表記されることが外国語活動においては肝要であろう。英単語の綴り字が常に学習者の目に触れることによってインプットとしての効果もあり、同時に英単語の音声情報を伝えるヒントにもなり得る。ただし、英単語を指導する際に重要となるのは(1)「映像・イメージ情報」、(2)「意味情報」、(3)「綴り字情報」、(4) 音声・発音情報(発音／アクセント／イントネーション等)の4つを同時に学習させることである。この点に関して太田(2013)は、英単語を学習する際、英語の意味や概念、綴り字、発音、アクセントは全てを一体として学ぶことが重要であると述べているが、同時に、このような指導が学校教育課程の英語授業において充分に行われていないことを指摘している(p.50)。また、前述のとおり、とりわけ小学校外国語活動は音声敏感期に該当する初期英語学習段階であるため(太田, 2012: 66, 68、太田, 2013: 40)、音声指導の重要性については特に留意が必要である。

今回の小学校外国語活動の参観を通じ、音声や発音面に関する主なインプットは、ALTとデジタル教材Hi, friends!が大きく担っているということを見て取ることができた。小学校学習指導要領において音声教育が重視されていることについては言うまでもないが、外国語活動で行われた児童に対する音声指導の教育的効果がどの程度のものであるかについては、今後十分な検証を行っていく必要がある。

## 5. 授業内容はどのように構成されているか

外国語活動の年間指導計画は、北九州市教育委員会が作成した「北九州スタンダードカリキュラム（小学校外国語活動）平成 25 年版」を多くの市立小学校が活用しており、レッスン毎の目標や評価基準、授業展開や言語活動例等がわかりやすく明示されている。外国語活動における教育効果の向上と発展に向けて教育委員会が果たす役割は大きい、その支援策の一つとして「北九州スタンダードカリキュラム（小学校外国語活動）平成 25 年版」は外国語活動の教育現場において有効に活用されている。

参観した授業は、前時の復習から導入し、続いてキーセンテンス “What time do you ～?” の学習が行われた。例えば、Student A : “What time do you get up?”、Student B : “I get up at 6 : 30.” を学習することが授業のねらいである。キーセンテンス “What time do you ～?” を指導するにあたり、(1) 数字の学習、(2) 時刻の表現方法の学習、(3) 動作を表わす英単語の学習の主に 3 つが行われた。まず、「数字の学習」では、時刻が 1 ～ 60（秒・分）の数字と関連が深いことから、電子黒板を使って英語の数字の読み方と発音練習が行われた。引き続き行われたナンバーゲームでは、1 ～ 60 までの数字を英語でクラス全員が順番に 1 人ずつ読み上げていき、3 の倍数の数字が来ると両手を叩くというゲームである。一見、易しそうに思えるゲーム活動であるが、児童たちは予想以上に困惑していた。原因として、(1) 自分の順番が回ってきた時の数字を英語でどのように言えばよいのかが分からない、(2) ALT が英語で説明したゲームのルールが理解できていないため、「数字が 3 の倍数の時に両手を叩く」という動作ができない、(3) 前の人の声が小さくて聞き取れず、自分の順番が回って来てもどの数字を言えばよいのかが分からない、等が困惑の理由として考えられる。ゲームの途中で学級担任が日本語によるルール説明を補足したことにより、ゲーム活動はようやく波に乗った。

次に、「時刻の表現方法の学習」が行われた。児童らは、直前の学習で 1 ～ 60 までの数字を学んでいたため、概ね正しく時刻を英語で表現することがで

きた。時計の文字盤教材を使用し、時刻の聞き取りや表現方法についても詳しく学んでいた。

さらに、「動作を表わす英単語の学習」が続いた。watch TV, play basketball, clean my room 等、日常的な動作を表わす英単語を中心にジェスチャーゲームを行い、どのような動詞をジェスチャーしているのかについて互いに言い当て合いながら楽しく学習していた。

今回参観した2回の授業で使用された英単語の総数は、既習・新出を合わせておよそ20個以上になる（※数字の1～60を含めると80個を超える）。文法項目に関しては、小学校段階では直接的な文法指導は行われないものの、中学校で学習する“What time ～?” / “It’s (時刻).” / “I (動詞) at (時刻).”等の重要な言語材料を多く含んでいる。児童の理解度や習得状況については今回の研究対象ではないため今後の研究が求められるが、授業自体の指導方法や指導内容に関しては、一定の評価に値するものであった。外国語活動の必修化初年度に小学校5年生であった児童は、既に中学校へ入学している。小学校外国語活動における学びを中学校英語科教育へ有機的に繋ぐためにも、中学校英語科教育に携わる者は、小学校外国語活動で何がどのように指導され、児童たちがどのような学びの課程を経てきたのかについて十分に把握しておく必要がある。北九州市内では教育委員会主導の下、一部の小学校と中学校間において小中連携英語教育の取り組みが既に実施されている。「小学校」や「中学校」という学校教育の形式的な枠組みを超え、小学校-中学校間に英語教育を通じた良好な連携関係を構築することによって、さらに優れた英語教育を実現できるものと確信している。英語教育に係る小中連携の取り組みは、初期英語教育がとりわけ重要であるという観点からも、今後の英語教育を支える一つの基軸的仕組みとなり得る。

## 6. 外国語活動における児童の学習の様子および授業の雰囲気について

外国語活動の授業を受ける児童たちの様子は概ね活発で、発表の際にも積極

的に挙手にて参加する姿勢が観察された（写真 1）。ALT の英語は明瞭ではっきりしており、声も大きく聞き取り易かった。児童を温かく包み込むような雰囲気を持つ ALT の存在で、授業全体が明るく湧らつとしていた。学級担任は、英語自体の指導に大きく携わる割合は低かったものの、常にクラス全体を見渡し、児童一人ひとりの能力や学習状況を見極めながら、行き届いた指導を行っていた。児童たちは、リラックスした雰囲気の中にも授業に臨む緊張感を持っており、指導者の発言や友人の発表にも熱心に耳を傾けていた。グループワークやペアワークになると互いに協力し合って取り組む姿勢が見られた。また、一斉授業へ戻った際の児童たちの切り替えが上手くできていたことも評価に値する。これらの学習態度の育成は、学級担任が中心となつて日頃から指導を行っている成果であり、一昼夜にして成せる業ではない。

授業参観は、想像以上に指導内容が充実していたことや児童たちの活発な学習姿勢が見て取れ、新鮮な驚きと感動を覚える有意義なものであった。ただし、気になる点としては、全体指導の際には児童らは大きな声が出ているものの、個別に発言が求められる場面になると、声が小さくなる傾向が観察されたことである。この傾向は、英語学習に限らず他の場面においても観察され得る現象ではあるが、児童の成長過程や心理的側面に配慮した指導上の工夫が求められるため、留意が必要である。また、積極的に挙手をする児童が重複しているケースが見受けられた。指名の際に重複を避けるよう指導者側の配慮がなされていたが、小学校段階において既に英語学習に自信のある児童とそうでない児童の格差が生じている可能性が窺えた。この傾向は、児童らの興味・関心の対象が異なっていることや、得意・不得意な分野が違っていること等からも必ずしも英語教育に限ったことではないであろうが、とは言え、この格差が義務教育段階や中学校入学段階において大きな広がりを見せないことが望ましいのは言うまでもない。しかし現実には、外国語活動を観察する限り、その差が既に小学校段階から生じ始めていることが確認された。

しかしながら、本研究は、小学校段階における英語力格差が必ずしも中学段

階以降も同様に続くものとは一概に結論しない。なぜなら、この点については、児童の縦断的追跡調査を行わない限り結論が難しい問題であるからだ。また、児童の成長過程や理解力、習熟のペースには個人差があり一様ではないため、小学校段階では潜在的な能力の育成は図られているものの、必ずしも顕在的に得意とするまでには至らなかった可能性を含んでいる。児童らは、その後の指導や自身の学習努力によって、新たな能力の開花に繋げる可能性を大いに秘めている。

したがって、小学校段階の外国語活動では、英語教育に係る潜在的な能力の素地の育成を最大限図ることに注力することが重要であると考えている。ここで意図する「英語力に関する潜在的な能力の素地」とは、第一に、音声面における認識力の育成である（リーパー、2010、太田、2012）。英語の音声的素地を育成するためには、英語音声を集中的・徹底的に聞かせることから始めたい。小学校外国語活動は今後更に低学年化が進み、早期からの英語学習開始傾向が強まると予測されるため、音声教育の重要性は更に高まる。特に英語教育の初期段階では、英語音声の認識力は発達段階にあるため、拙速に発話行動へ臨ませるのではなく、むしろ英語特有の音声やリズムをじっくりと聞かせ、内在化させることに集中することが望ましいと考えている。指導者は、英語の紙芝居や童話、冒険物語等、ストーリーと豊かな音声表現が楽しめる教材を好んで選ぶようにすると良いであろう。また、児童がイメージや感情と結びつけて学習できるよう、音声とともにイラストや映像を伴う簡易な英語教材が望ましい。児童への英語学習は「教え込む」ものではなくむしろ好奇心を刺激し、心や感性で楽しみながら習得を促すことが望ましいと考えている。音声面における教育も例外ではない。歌やチャンツ、音声教材等を繰り返し聞く体験をできるだけ多く設けることで、体得的に音声感覚を身に付けさせるような指導を徹底したい。

筆者が考える第二の「英語力に関する潜在的な能力の素地」は、異なる物や人に対する寛容性の育成である。グローバル社会において求められる資質の一

つは、自身とは異なる人や物、文化や言語、考え方や生活様式等に対する柔軟な対応力と理解力である。このような時代に対応し得る人材を育成するためにも、また、社会において円滑な人間関係を築く能力を育むためにも、早期段階から自国の伝統や文化の素晴らしさを知り、同時に相異に対する寛容性や多角的な視野を養うことは重要である。外国語活動はこの点に関しても貢献度の高い活動であり、児童の全人教育の場として極めて有意義な時間である。外国語学習における「音声教育」と「異文化理解教育」の重要性については、小学校学習指導要領（2010）にも明記されているとおりである。

## おわりに

「百聞は一見に如かず」とはよく言い当てた言葉である。小学校外国語活動の授業では、ALT や先進的なデジタル教材等の活用が積極的に進んでおり、指導の在り方や授業内容については概ね良好なものであった。しかし一方で、外国語活動の授業効果として、(1) 児童個々人が体得しつつある音声面に關する習得状況についてはどの程度成功しているのか、(2) 異文化への理解教育はどの程度深化しているのか、(3) 学習内容はどの程度児童に定着しているのか、等については明らかにされておらず、今後の検討課題である。

本研究は、小学校外国語活動について、事前に設定した6つの観察上のポイントに留意しつつ参観記録を取り纏めたものである。参観対象校が北九州市内小学校1校の限定的な事例研究であるため、指導者の授業力や児童の実態、クラスや学校間の違い等により、外国語活動の在り方は様々に異なるものと思料される。したがって、今回の報告内容を単純に一般化することはできないものの、外国語活動の現場を知り得る一つの事例的資料としては意義深いものと思われる。

小学校外国語活動は今後、開始学年の早期化・教科化・評価化・授業時間数増・指導者育成・専科教員養成等に関する検討が行われるに伴い、様々な課題

に直面することが予想される。外国語活動の動向については今後も継続的に議論を重ね、小学校外国語活動ならびに日本の英語教育の望ましい方向性と発展性について、慎重に検討を重ねて行きたい。

英語教育全体に新たな転換期が訪れようとしている現在、まずは、小学校外国語活動指導者と中学校英語科教育指導者は、互いの指導内容や教育の現状について情報を共有し、知り合うことから始めて欲しい。特に中学校の英語科教員は、2011年度以降必修化された小学校外国語活動の現状を「観て」・「知る」ことが第一歩である。小学校段階の学習内容を踏まえ、関連付けながら中学校英語教育を更に充実させることによって、重複指導による無駄を減少させ、学習者のモチベーションを高めつつ、より効果的な学習へと繋げることが可能となるであろう。手探り的な状況の最中にあっても、鋭意指導に取り組んでいる小学校外国語活動担当者の努力と、児童の積極的な学習への歩みとが、更に豊かな教育成果として結実されるようお願いしたい。また、小学校外国語活動の指導者から中学校英語科教育の指導者へ、英語教育のバトンがしっかりと引き渡されるためにも、小学校外国語活動担当者は、小学校段階で形成された英語教育の素地が、その後の児童の英語学習に確実に影響を及ぼすということを自覚し、責任を果たすことが期待されている。同時に、中学校英語科教育担当者は、児童たちが小学校段階で何を学び、何を身に付け、どこまでできるようになってきたのかを予め掌握しておく必要がある。小学校外国語活動の必修化に伴い、小学校と中学校の英語教育における連携関係構築は益々重要度を増すであろう。小学校での指導内容や学習過程を考慮せず、従来どおりの英語教育が中学校で上手く行かなくなってしまうことに後々気付くようでは遅すぎる。小学校外国語活動は、これに続く中学校 - 高等学校 - 大学の英語教育へ、既に連鎖的波及を齎し始めている。

最後に、小学校外国語活動の授業をこの度参観させて戴くにあたって、貴重な参観の機会を快く与えてくださった北九州市立花尾小学校の今泉校長には心

からのお礼を申し上げたい。また、授業参観に笑顔でご対応くださった ALT の先生、学級担任の沖村先生、そして活き活きと学ぶ様子を参観させていただいた児童の皆さんにも心から感謝している。これからの未来社会を担っていく児童の皆さんの今後益々の成長にも大いに期待しつつ、謝辞としたい。

### 写真一覧

写真1 外国語活動の授業風景：外国語活動を指導する担任（右）と ALT（左）

写真2 外国語活動を行う教室の入口

写真3 外国語教室内に掲示された英単語・イラストカードの一例

写真4 電子黒板でデジタル版 Hi, friends! の画面を操作する ALT

写真5 外国語活動で電子黒板を操作する児童（左）と ALT（右）

写真6 授業で使用する絵カードと時計の文字盤教具

写真7 おはじきを活用したアクティビティー

※本論文で紹介する外国語活動の授業風景写真は全て、筆者（太田）が撮影したものである。

なお、写真の論文掲載については了承を得ている。

### 参考文献

太田かおり（2012）「日本の英語科教育における音声指導の現状－初期英語教育における音声指導の導入及びその指導法の確立を目指して－」『九州国際大学社会文化研究所紀要』69, 53-73.

太田かおり（2013）「日本の英語教育における盲点－音声教育の現状と課題－」『九州国際大学国際関係学論集』8, 37-69.

加賀田哲也（2012）「小学校と中学校のギャップと指導上の留意点」『英語教育』60（11）, 16-18.

加藤拓由（2014）「小学校英語に学級担任が関わることの重要性（児童の動機付けと、学びの構造に着目して）」、言語教育エキスポ 2014 予稿集（2014 年 3 月 9 日開催 於早稲田大学）, 66-67.

北九州市教育委員会（2013）「北九州スタンダードカリキュラム（小学校外国語活動 平成 25 年版）.

- 小嶋英夫、尾関直子、廣森友人 (2010) 『成長する英語学習者—学習者要因と自律学習—』  
英語教育学大系 第6巻, 大修館書店.
- 白井恭弘 (2010) 『外国語学習に成功する人、しない人—第二言語習得への招待—』岩波書店.
- 文部科学省 (2010) 『小学校学習指導要領解説 外国語活動編 平成20年改訂版』東洋館出版.
- 文部科学省ホームページ (2013年12月13日公表) 「グローバル化に対応した英語教育改革  
実施計画」. ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/25/12/1342458.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/12/1342458.htm)  
最終閲覧日: 2014年4月1日)
- リーパーすみ子 (2010) 『アメリカの小学校ではこうやって英語を教えている』径書房.